

## ディオニュソスに憧れる アポロ俊英の徒、湯田豊さん

岡野哲士

「ひどいタイトルだねえ。わたしや読む気にならんどころか、眼にするのもいやだよ。」と、きつと湯田さんは言いたくなっているだろうと思います。しかし、待つて下さい湯田さん。私の中に余りにも印象強く、湯田さんの発した言葉が音声をともなつたまま、留まり続けているのですから。

湯田さんは憶えて居られるでしょうか。「わが友ニーチェは……」、湯田さんがかなり多数の聴講学生を前にして、一段と声を張り上げて発した言葉です。私が「湯田さん少少激して来てるな」と思つている矢先のことでした。

十数年前のこと、私たち数人で「総合講座、『東西の死生観』を開講し、輪講形式の講義の最後に、担当した全講師参加のシンポジウムを行ないました。湯田さんの発言が続き、私の胸の内では、若いか血気盛んなどかいう形容詞が去来していたのですが、「わが友ニーチェは……」の件りに至つてそれらは全く一掃され、私の胸中は羨望の念で、舌打ちしたくなるような羨望の念で、満たされてしまったのです。舌打ちしたくなるような羨望の念というのは、これ程までに卒直に、自分の思いとか憧れとかを表出できることに対する嫉妬心まじりの驚きとでも

言つていいものです。ニーチェは、私にとつても非常に魅力ある思想家です。しかし、到底、友達にして親しく交き合いを続けて行こうなどと思える人物ではありません。それなのに、湯田さんはあの声音で「わが友ニーチェは……」と言われた。勿論、誰だつてある年齢に達すれば、自分の憧れをそのままストレートには言葉にしないけれども、湯田さんは本当に文字通り天衣無縫で、縫い目のほころびからだけおのれをさらすなどという輩とは無縁なのです。神奈川大学在職中に夥しい数の著作を発表した湯田さんのどの作品を読んでも、そこではいつも、非常にストレートに湯田さんの憧れや思いが表出されているのに気付かされるのは私だけではないでしょう。こんなこともありました。神奈川大学に就任されてから数年間、湯田さんは何か事ある毎に、東京大学大学院の恩師中村元氏を槍玉にあげていました。その頃のこと、私はこんなことを言つて、湯田さんの口をとんがらかせたことがあります。「湯田さんの中村氏に対する攻撃の言葉は、僕には非常に卒直な言葉としか思えないんですけど。」と。失礼極まりない、ひどく傷付ける言辭ではあつたと思いますが、何度も同様なことを繰り返し聞かされていた私には、それが激しくそして詳細なことに及べば及ぶ程、実に卒直な求愛の言葉としか受けとれなくなつていたのです。「いやあ湯田君、君、仲々読めるね」という言葉が中村氏の口から湯田さんに向かつて投げかけられるのを湯田さんはどんなに待ち望んでいたことか。それを湯田さんの批難の言葉の多さと激しさとが余りにも卒直に物語つていると私には思えたのでした。

まちがいなく、湯田さんは東京大学の印度哲学科大学院に進まれてからは一段と、よく勉強する人であつたのだと思います。印度古代の宗教哲学について他の誰よりも深く理解し、そこでは人間がどのような存在として捉えられていたのかを誰よりも豊かに分かつたいと思ひ、日夜努力を怠らなかつたにちがひありません。そのことは、そ

の後の湯田さんの多くの仕事、作品に結びついていますし、何よりも第三十六回日本翻訳文化賞受賞の快挙をもたらした「ウパニシャッド」完全訳で大輪の花を咲かせたと言えましょう。そして湯田さんが「自著（『ニーチェ、真理の迷路』を語る）」の中で、「ニーチェ哲学の背景にあるのは、インドないし仏教です」と明言していますが、ニーチェ、フロイドとの出会いもその延長線上にあつたのだと思います。その同じ小論の中で、「彼（ニーチェ）は、彼の同時代のヨーロッパにおける人生の大問題を解決しようと努力しております。人間とは何であるかという問いに、彼は真剣に答えようと思いました。」（傍丸筆者）と湯田さんは述べています。実は、この叙述が私にこの小拙文のタイトルを思い付かせたのです。「ニーチェが熱く語つたのは、人間とは何であるかではない。かれは人間とは何であり得るか、または、どういうものであらねばならないかの問いに答えようとしたんだ。」と私はつぶやかざるを得なかつたのです。その時、私の中に宿つて、時時声を出す「ミクロ・ソクラテス」がそのつぶやきに呼応し始めてしまいました。「湯田さんはニーチェの思想あるいは哲学をその外にあつて正確に理解しようとしている。だから、『ニーチェについての誤つたイメージを拭い去らねばなりません。』なんぞと殊更言うのだ。湯田さんは『ニーチェ、偶像のたそがれを読む』の中で『ニーチェを読むことは、危険に生きることである。』と書いておられるけれど、それは学会の中で、危険に生きることであつてそれ以上ではないだろう。ニーチェは正確に読むだけなら現実の世界では、危険でも何でもないんで、『身に読む』という限りにおいてのみ、危険なのだ。」と。その声を聴き終つて私は、「そう、湯田さんは人間を何であるか深く理解し、分かるうと努力し続けて来た学究の徒、卓れた学究の徒なのだ。デイオニュソスへの憧れを捨て切れぬままに。」と結論してしまつたのです。

湯田さん、「私は第二の人生なんていうものを考えられないし、考えようとも思つて居りません。」と言ひ切られ

ましたが、私より一年先にフリーになつた現在を、危険一杯のうちに生きて、ニーチエを乗り超えて下さい。好  
好爺の湯田さんなんて見たくありませんから。

尚、最後に一言お断わりをして、御理解たまわりたいことがあります。拙文中、私は終始湯田さんと書いて来ま  
した。少しばかりへソマガリな私は、「教授」とか「先生」とか「哲学者」とかの言葉を一種の「忌言葉」と理解  
しているものですから、そのようにさせていただきます。乞許無礼。